

格ゲー？の世界へよう  
こそ！

あきゆおす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

K O F の世界かと思ったらD O M (D a y s o f M e m o r i e s) よりの世界に転生したとある青年の話。

オリジナル設定やご都合主義的な部分が出てきますのでご注意ください。  
不定期更新です。作者の趣味の多重クロスもあるかもしれません。

# 目次

とある高校生の1日(前半) | 1



## とある高校生の1日（前半）

昔々、あるところに一人の男の子がいました。

その子は昔から頭はよかったです。運動神経は並でした。しかし、男の子は格闘技をやりたいと駄々をこねていました。

困った親はネットやチラシから探していると、近くに柔道を教えている道場があったので、男の子を連れて行きました。男の子はその道場をたいそう気に入りましたが、親はいつか怪我するのでは、とハラハラしておりました。そんな親をしり目に、男の子は大きな怪我もなくすくすくと育ちました。

しかし、ある日のこと。男の子がケンカしたような（一部焦げた）傷を携え帰ってきました。これには親は大慌て。親は何事かと問いただすと、一言だけこう答えました。

「リア充死すべし、慈悲はない」

「って昔話があつてだな……。その昔話を聞いた俺はリア充を駆逐しよう」と。

「いやいや！話の脈絡が全然ないですし、ネットとかリア充って言葉が出てる時点で昔話じゃないですから！」

とある高校の屋上。3人の男が焼きそばパンをほおぼりながら仲良く(?)話をしています。

「ああ、あんときのことか。しかもそれお前のことだろ」

「悪かったな！逆恨みでよお！やんのかあ草薙い!？」

「ふん、返り討ちにしてやるよ!」

「ストップ！ユキさんや大門さんに言いますよ!」

「「ああ!」」

「ひい!?!ごめんなさい!」

委縮した後輩を横目に二人は驚くべき速さで焼きそばパンを食べたあと、組手ケンカを始めた。片方の男が手から炎を出しながら。もう片方がその炎をガードしながら。

「喰らい、やがれえ!」

「喰らうかボケエ!」

「・・・はあ、仲いいんだか悪いんだかよくわからないなあ」

そういうと、二人に睨まれた青年は焼きそばパンを食べ始めるのでした。

「さよならー」

「おう、気をつけて帰れよー」

放課後。青年が通りすがりの教師と定番のやり取りをしながら、今日はどうするかを考えながら校門を出ると、彼のスマホにメールが入っているのに気付きました。差出人の名前欄には四条雛子と書かれています。メールを開くと、そこには相撲の練習への勧誘の文言が書かれています。

（うーん、四条さんの練習ハードだけどちゃんこ鍋が美味いんだよなー）

少し悩んだあと、彼は荷物をまとめ、美味しいちゃんこ鍋のことを思い浮かべながら学校を出るのでした。

（誰か巻きぞで…一緒に連れていくか。目ぼしいのは…）

と、考えながら歩いていると、向こうから見知った顔が歩いてきました。

「あれ、一二三さん。おつかれさ…」

「はい確保。四条さんそこ行きますよ、ケンスウさん」

「え、ちよっ」

運のいいことに、たまたまそこら辺を通っていたケンスウを捕獲し、青年、一二三は雛子の待つ練習場へと向かうのでした。

「いやー、旨かったわー！ごっそさん！」

「ごちそうさまでした。私たちも呼んでもらってありがとうございます」

「ありがとうございます！」

「いえいえ、やっぱり鍋はみんなで食べた方が美味しいですから」

稽古が終わったあと、雛子が呼んだのか、途中から合流したアテナと包と一緒にちやんこ鍋を平らげて一息ついていました。

「あとな、一二三。さすがに問答無用で人を連れていくのは止めてくれへん？」

「いやそこはケンスウさんですし」

「ははは超球弾やあ！」

「へぶう！」

「…ケンスウさん、手加減なしはさすがに痛いんだけど」

「そこは一二三やからな、手加減したら意味ないやん」

「ふふふ、仲いいね二人とも」

「いや、全然」

ちやんこ鍋を食べ終わったあと、一二三はケンスウたちと歩きながら帰っていました。

「…そういうえば食材買って帰らないといけなかったな」

「え、一二三さんまだ食べるの？」

「いや、ウチのアパートの人らに…」

「ああ、なるほど」

そのとき、一二三は少し考えたあとに閃いたようににやつとしました。

「あー、そうだ。パオ、クリスが会いたがっていただけ。ついでにウチ来るか？」

「え？」

クリスとはこの前会ったばかりなのに、と伝えようとしたが、一二三のアイコンタクトの意味に気付いたパオはその思惑に乗ることにしました。

「…あー、はい！ボクも一二三さんのアパート行くよ。二人は先に帰ってて下さい」

「え、でも…」

「大丈夫、俺が責任もって送るから」

「…分かったわ。パオ、一二三さんの言うことしっぴかり聞くのよ」

「はい！」

話が終わると、一二三はアテナにバレないようにケンスウにアイコンタクトをとり  
ます。

意図に気付いたケンスウは顔を赤くしながらも、ありがとさん、と口パクで伝えました。

そのあと、ケンスウたちと別れ、パオから二人の進展を聞きながら帰途へとつきました。

「え、告った返事まだもらってないの？」

「そうなんですよ」

「おかしいな、アテナも満更じゃないと思っただけど……」

そうこうしているうちに、一二三が住むアパートへと着くと、待つていたとばかりに手を振る影がありました。

「ひふみく、お腹すいた」

「お帰りもなしにねだる人に食べさせるご飯はありません」

「にやはは、冗談だつて！おかえり、ひふみ」

グラマラスな体ながらも幼そうな物言いのギャップのある、更に服装もギリギリな女性を前に、一二三は慣れていますが、パオは顔を背けながら挨拶をします。

「こ、こんばんは、アンヘルさん！」

「よつ、パオ！クリスマスなら自分の部屋いるよーん」

「は、はい！失礼します！」

顔を真っ赤にしながら一目散にクリスマスの部屋に行くパオをばいばーい！と見送るア

ンヘルに、一二三は声をかけます。

「あんまり子供を惑わすなよ？」

「はいはい。そんなことよりごーはーん！」

「はいはい。そういえばK…じゃなくてテツヲとナナシは？」

「んー二人なら…」

アンヘルがアパートの裏を指差した瞬間、何やらものが壊れたような大きな音がしました。